

協議会ニュース

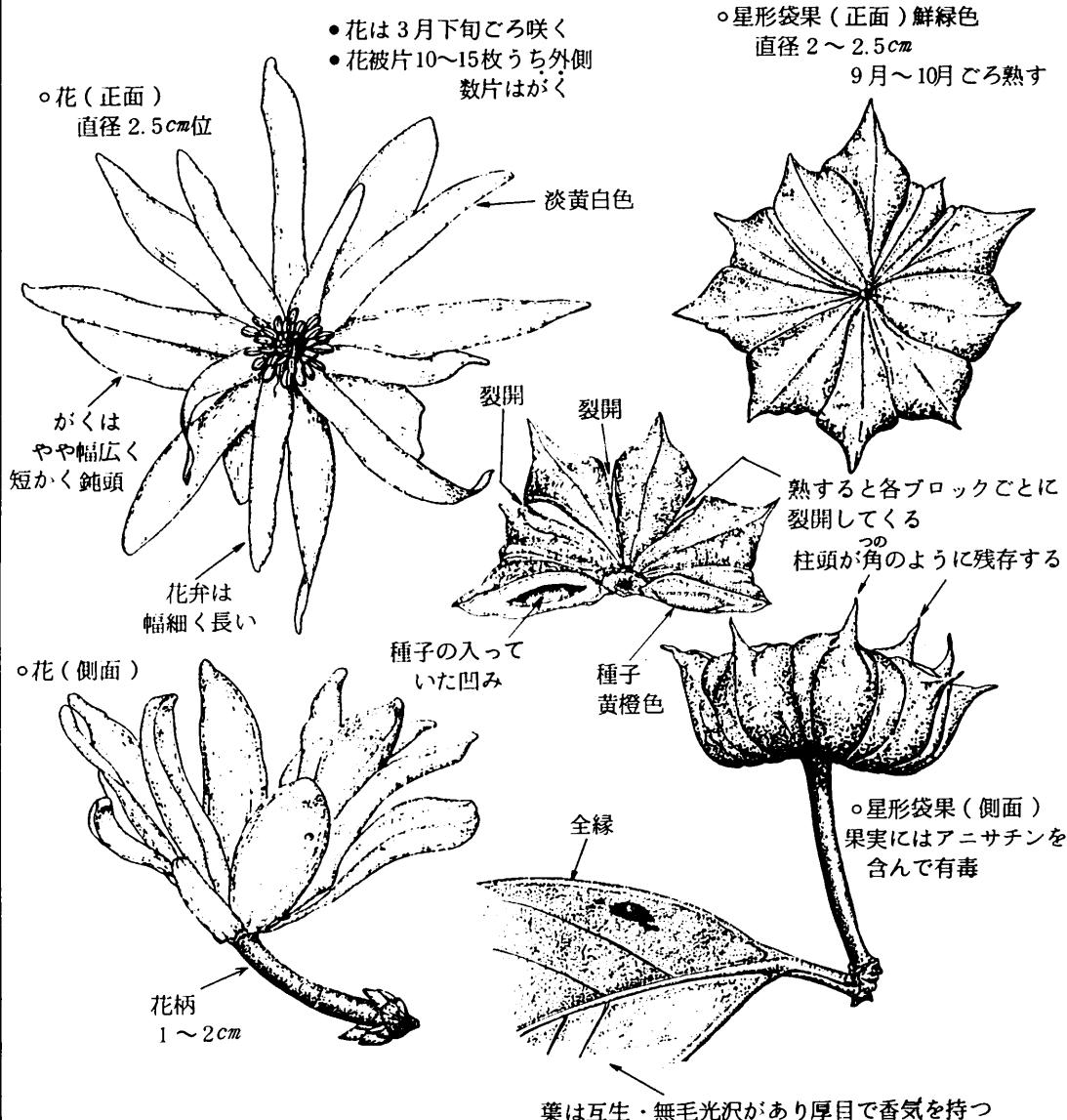
31号

愛知県自然観察指導員連絡協議会

平成3年
2月

10周年記念特集号

“常緑樹林に春のシグナル”



(安城市大山町にて 1990) 辻

オピニオンリーダーとしての 自信を持って頑張ろう

日本自然保護協会常務理事 金田 平

協議会発足から十年のこと、鳳来町で初めての養成講座を開いたのを思い出しながら、関係者の皆さんにお喜びとお礼を申し上げます。俗に「十年一昔」と言いますが、世の中の移り変わりの激しさは一段と加速しているのでこの10年は「一昔」どころの変わり方ではないと思うだけに感慨ひとしおです。

(財)日本自然保護協会が自然観察指導員の養成講座を始めた時代背景や意図についてはあちこちに既に書いたことではありますが、たとえば「自然観察」という言葉についても、時代受けする横文字かカナ書きの新しい言葉にしようという検討もしました。自然観察が理科の学習と言った勉強のイメージを持つのではないかという懸念があり、我々はもっともっと日常性の強いいわば生活に密着した、しかもそれが気楽に、時にはレクリューションに位置づけられるようなものであって欲しいと云うものであったからです。いま新聞や雑誌の催し案内コーナーにでの自然観察会案内（お蔭様で随分多くなりました）を見ると我々の持つイメージに近づいているように思えます。自然観察指導員にしても当初は文部省や環境庁と連携して公的な色が出せないかと考え、それなりの努力もしてみましたが結局協会独自で始めました。これも各地で環境庁の職員や地方自治体の職員が受講してくれるなど世間の評価が定着してきてくれています。当初に担当したものとしては本当に嬉しいことです。

自然保護についても、当時は日本自然保護協会の立場がプロテクションではなくコンサーベーションだと云うことの理解を得ることがまず基本でした。しかし今「地球が危ない」と言う情勢となり、その情報はまさに氾濫しています。「地球にやさしく」が合言葉になったわけです。とは言え、フロン製品を使うのは止めようとか、象牙や鼈甲製品を使うのをよそうと言うようなのは分かりやすくいいのですが、二酸化炭素排出の減量の様

なものについては一筋縄では行きません。産業保護は依然最優先です。自動車保有者は増え続け、道路網は益々ひろがっています。二酸化炭素の排出量を減らそうと言う話はどこかにすっとんでもしまっているわけです。紙にしてもそれが熱帯林の保護と深い関係にあることが知らされ再生紙に関心が深まることは成果ですが、再生紙ならふんだんに使っていいような雰囲気で、紙の需要が伸びてしまっています。やたらと地球にやさしくと言うキャッチフレーズが使われ、その実ちっとも地球にやさしくなったりしているのが気になります。ライフスタイルを変えようと言うのは容易なことではありません。

「子供が危ない」と言う声も大きくなりました。我々は便利さと豊かさが子供の体と心を蝕み自己家畜化を進めていると指摘し続けてきました。子供の健全な発育のための自然接触のプログラムも我々の重要な課題です。それだけに兵庫県自然教室のシキミ事件を教訓にしなければなりません。活動の歴史的評価と誠意ある事後の行動が、地元の理解を得、催しそのものは支持されました。リーダーの研修をきちっとしようと言う形で兵庫も頑張っています。

いま自然観察は、楽しみで有効なレクリューションとなり、子供にとっては健康な発育の糧となりながら、自分の健康な生活が保証されているか=身近な自然は健康か、そして自分の住む土地の価値が有効に活用されようとしているか=身近なリゾート開発が適切か、を監視するのに役立たねばなりません。

我々の開発した荷札方式や、紙芝居方式も使用理念に不満のあるものもあるにしても各所に普及しました。タイムスリップ・オリエンテーリング、シティーサファリー等新しい催しが開発されていることも実に頼もしいことです。自然保護の第一線を担うものとしての自負を持ちながら地道に努力を続けましょう。

協議会の10年に当って

会長 大竹 勝

昭和55年に愛知県で第1回の自然観察指導員講習会が開かれ、その時の受講生50名余で、昭和56年4月に私どもの協議会が発足しました。

その後10年間に7回の講習会が行われて、協議会の会員も年々増加し、今では300名の会員をもう1つ会にまでなりました。

自然観察指導員という肩書きは立派ですが、会員の自然に対する知識や考え方は様々であり、またそれぞれに職業を持つ身ではありますが、多くの方の協力により、10年間に協議会として関係した観察会は延べ160回に及ぶなどの成果を挙げてきました。

私どもの会の趣旨は、自然の成り立ちや大切さを多くの人々に伝えることです。自然を守るために活動といえば、一般には自然保護運動を行うことのように思われますが、私どもの会では特定の自然保護運動を行うことは考えておりません。そうした運動も必要とは思われますが、私どもの会ではその前段階として、多くの人に自然の良さ・美しさを知ってもらい、自然の仕組みの観察を通じて、自然は何故大切なのか、また私達の生活とどのような係わりをもっているかを考えていただくような活動を目標としています。貴重な自然を守ろうとする自然保護運動が医者の仕事だとすれば、私どもの会は保健所の仕事を目指していると言えましょうか。自然観察会などを通して自然の仕組みや大切さを多くの人とともに考えていくことにより、社会的に自然を守ることへの理解を深めようというのです。

こうした考えから、協議会の事業を、自然観察会などにより自然の仕組みや大切さを伝える普及事業、会員等が自然に関する知識や考え方を深めるための研修事業、現在の自然の状況などを把握するための調査事業の3つの柱として活動しています。

協議会が設立された頃は、自然観察会もあまり開催されていなくて、一般の方はほとんどその名

前すら知らなかったのですが、多くの方の努力により、今では自然観察会という言葉もかなり知られるようになってきました。新聞の行事欄を見ても、毎週のように自然観察会の案内が載っています。このように、自然観察とか自然に親しむという言葉が、多くの方の関心を引くようになったのは、やはりそれなりの背景があるのではないかと思われます。

今まででは、地球上の環境は限りなく広くかつ豊富であって、人間がどのように振る舞ってもそれ程の影響はないという前提で、様々な開発などが進められてきました。しかし、人間の力が今のように大きなものになってしまふと、地球上の環境と言えども、十分に広くもなく、また豊富でもなくなりました。

科学技術と経済の発展により、私たちは豊かさと、合理性を追求してきましたが、地球の環境が限りあるものと気が付いた今よく考えてみると、私達の生活が以前より本当に豊かになったのか、また私達の求めていたものが本当に合理的なものか疑問になってきました。

私達人間も生物の仲間であり、自然から離れてはやっていけないものです。自然は、資源として経済的な恩恵を与えるものである以上に、人間に生物として必要な生命力あるいは心の豊かさを与えてくれる大切な存在であることを考えてみる必要があると思います。私達が生活の豊かさや便利さのみを追求するあまり、心の豊かな生活を続けるよりどころを失っていくとしたら、それは日本の将来にとってこの上ない不幸ではないでしょうか。

こうしたことを考えますと、私達の取り組むべき課題はまだたくさんあります。自然観察会においても、ただ知識の押し売りをするのではなく、どのような方法で何を伝



えるのかをさらに研究する必要があるとともに、開催する場所や対象者についても検討する余地があるようです。また、観察会以外にも自然の大切さを訴えたり、自然と付き合うためのマナーなどを普及するための事業が幾つもあると思えます。県内の自然の現状についても解っている事は、ほんの一部に過ぎません。一度に多くの事業に取り組むことは困難でしょうが、着実に一つひとつの活動を積み上げていくことが、今後の協議会の活動にとって必要と思われます。当面は、会の組織体制を見直し円滑な運営ができるように改めながら、順次いろいろな事に取り組んでまいりたいと存じます。

この機関誌に掲載してあるように、他府県の連絡会もほとんどがいくつもの問題をかかえています。

それは、自然観察指導員の制度が動き出してほぼ10年たち、その活動の転換期に差しかかったためでもあると思われます。日本自然保護協会が作り、育てた制度ですが、今後指導員がどのような方向を目指すのかは、私達自身が考えて決めていかなければならないようです。自然に関する知識や考え方も様々な多くの指導員が、自然保護のためにともに活動することの難しさが、これからはよりはっきり出てくるような気がします。

ともあれ、同じく自然を愛好するものの集まりですから、共に楽しみながら、考えながら、時には議論をしたりする中で、今後のより良い活動の方向を探っていきたいと思います。会員の皆様のご協力をお願いします。

アンケートに見る観察会の変遷

東三河支部 中島 芳彦

自然に親しみ、自然の素晴らしさを肌で感じてくれる人達が、より多くなって行くことを願いつつ、自然観察会が開催されているが、参加者や指導者の意識も少しずつ、変化しています。

さらに、各支部のデーターを比較検討すれば、各々の地域の特徴が表れると思います。

アンケートの取り方一つでも年毎に相違しており、データーについては、比較検討の可能な過去5年間の東三河支部での実施した県委託の自然観察会に限定し考察しました。

勘案する必要がある。

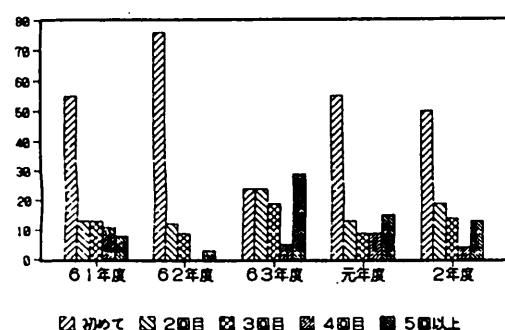
2. 広報活動

より多くの人達に参加してもらうためには、広報活動は不可欠であるが、図2に示す様に、新聞等のマスメディアは、うまく行けばその効果は、期待できるが、人間は身近な情報に左右されるのではなかろうかとの判断に基づき、前年度参加者への案内状の送付や、口込みによる情報伝達を昭和63年から実施する。この様な情報伝達は、親しみが倍増するものと思われる。

図1 観察会参加経験

1. 観察会の指導方針

自然観察会の始まった当初は、参加者の底辺を広げるため、クイズ形式や、おみやげ等で「連がり」を保つことに努力して来ましたが、中間期頃から自然観察会参加のベテランが増加し、これらの要望にどの様に対応するか討議された。しかし、図1の様に初めての参加者の割合が大きな現状を踏まえ、広く浅い指導で行うよう方向づけられた。しかし20%余のベテラン参加者の希望も、今後



3. 幅広い年令相の参加を

観察会参加者の年令分布を考察したところ、図3の様に中学生以下の子供の比率が少なく、40才以上の女性が半数を占める傾向は過去5年間変化していません。

平均してより多くの参加者を求めるには、子供会やボーイスカウト等への呼掛けも考えられるが、組織動員よりも、自主的に参加してくれる人達の増加が、より発展するのではないかと思われます。

ごろ寝にテレビや、ゴルフ通いのお父さん、塾通いの子供達が興味を持ってくれる観察会にするには、今後どの様にすべきか真剣に討議したいところです。

4. 観察会の希望場所

観察会も会を重ねるに伴い、参加者の意識も変化し図4の様に、当初は自然と言えば山と答える人が多かったが、この頃では、海岸や川等、幅広く平均化してきたことは、会の目的を半ば達成したものと思われます。今後、この様な考え方の人達が増加して欲しいものです。

また、実施時期は、春か秋が大勢を占め真冬の観察会が敬遠されている。

図2 観察会を知った手段

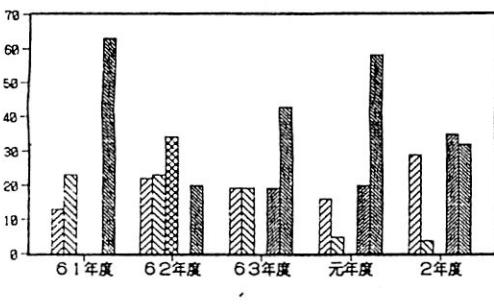
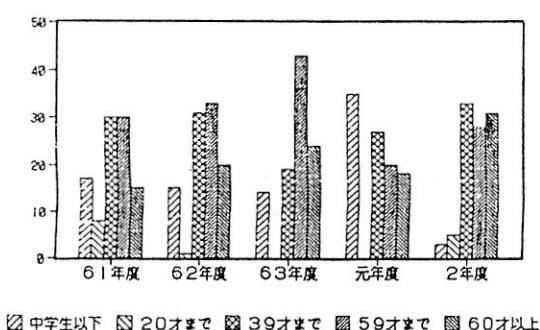


図3 年令別の状況



5. 観察会の将来展望

観察会に参加した多くの人達が、「自然を見る楽しさを覚えた」とか、「自然を見る目が変わった」等の、十分に満足して頂けたものとは思いますが、今後はこの様な感覚プラスどこが、どの様に良かったのか、例えば、表浜と、内海の違い、河口と上中流域の違い、街中と田園地帯の違い等の比較組合せを行い、一つの物語になるような観察会が出来れば、ベテラン参加者も満足し、観察会の資質の向上が図れるものと思われるがいかがでしょうか。

図4 今後の観察会希望場所

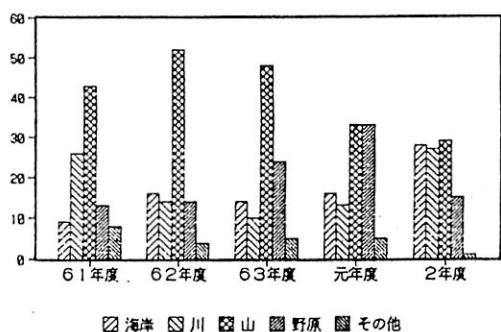


図5 参加者数の推移

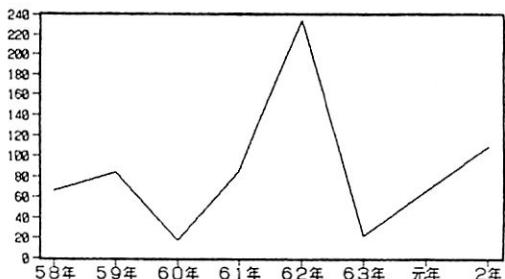
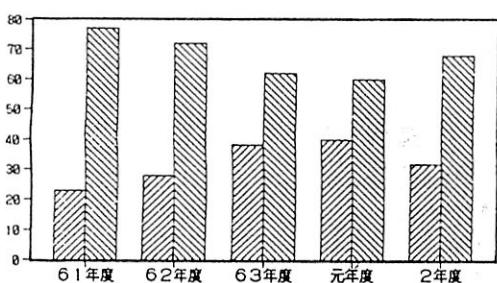


図6 男女別の状況



会員の意見（協議会に望むもの）

自然観察会に期待すること

名古屋支部 川崎慶子

現在、中高校生に理科を教えたり、環境問題について考えたりしている。

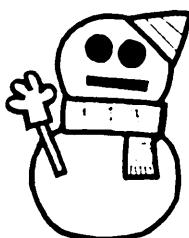
勤務している学校も名古屋市内であるが、生徒も市内の者が多く、自然に恵まれた生活をしている者は少ない。また、最近の中高生は、端から見ても学校行事、クラブ、習い事、塾などで忙しい。

かくいう私も、名古屋生まれの名古屋育ち。受験とクラブ活動に追われる十代を経験した俗にいう「共通一次世代」である。

観察会には、現在育児のために御無沙汰しているが、5年ほど前から時々参加させて頂いた。指導員の皆さんのお話を伺っていつも感心するばかりだが、その中で、子供の頃から山や川や海に親しんでいて、自然が生活の一部になっている様な方の自然の造詣の深さには、私とスケールが違うと感心することが少なくなかった。

教育の現場では、ありがたいことに実際の自然を知らない私たちでも、すぐれたビデオ教材で、たとえば長良川河口堰問題や地球環境の危機、日本のゴルフ場乱開発などの問題点をだいたい把握できるようになった。

しかし、今後さらに深刻化する環境問題、乱開発を考えるには、子どもたちに少しでも森を歩くことの心地好さや魚の生態のおもしろさなどを実際に体験する機会を増やしてやってほしいと思っている。



自然観察会について思うこと

尾張支部 平井直人

初めて愛知県自然観察指導員連絡協議会の催しに参加したのは、定光寺で水生昆虫を夢中で捕まえ、講義を受けたときです。そのときは指導員のこととも、協議会のこととも何も知らなかったのですが、なんておもしろくて、中身がぎっしり詰まった企画だろうと思い、とにかく大感激の1日でした。

それから自然観察指導員講習会に参加して、もう5年目になります。そのときの感激は、今月例観察会でも続いている。毎月テーマを決めて行なっている観察会なんてのは、そういうものではありません。ところが、こんなにしっかりした月例観察会があるのに、新しく参加してくる人たちが増えません。私は県委託の自然観察会よりも、むしろ毎月行なっているという利点のある月例会の方をもっと重視するべきで、月例会の方にも一般の人々が参加できるように宣伝する必要があると思います。こんなに楽しい自然観察会はそういうものじゃないのだから。

思いつくままに

尾張支部 三輪治代美

10年を迎えた協議会が、当面どんなことに取り組んだらよいか、思いつくままに書いてみました。

- 協議会の名前を代えることは一考を要するが、サブネームを設けてほしい。（今の名前は、イメージの点で損をしているようで、内的な活動のみに受け止められやすい。）
- 観察会に限らず、対外的な活動をもっと多くした方がよいのではないか。（対外には、個人や公の団体にとどまらず、企業なども含めて）
- 宣伝をもっと行ってはどうか。（内外に向け

て存在感を強めるため)

- ハードとソフトがあるといいな。(2つの意味を込めて)

最後に、協議会ニュースの前号の会員近況を読んで、会員の様子についてもっと詳しく知りたくなりました。“会員レポート”のコーナーを設けるのはいかがでしょうか。調査報告のような文章ではなくとも、レポーターが聞いてくるなんているのはどうでしょう。(大変かな ?)

平成 3 年の正月にあたり、より多くの人達に自然(私達人間も自然界の一員であるが) を体感してもらう機会を提供し、一人でも多くの理解者が得られる一年であることを念じベンを置きます。



多くの人が参加する会に

協議会に望む

東三河支部 丸山嵩

昨年の暮れに支部長より本稿を依頼されました。が、指導員として特に実績もなく、また専門知識もない私としては、本題ではおこがましくてペンが進まないため、拙い経験から得た「私の自然観察感」について、以下述べてみたいと思います。

昭和 62 年、私の勤務先では創立 50 周年を迎え、「心の豊かさ」を基本テーマに各種イベントを展開することとなり、その一環として“親と子の自然観察会”を実施し、以後毎年夏休みに約 50 組の親子の参加を得て、本年で第 5 回目を数えることとなりました。

私は、同年 11 月に定光寺での講習会に参加し指導員となったのですが、それまでは自然観察会も、協議会もその存在すら知らず、指導員となって初めて、存在の意義、目的を知り得たのですが、私達の子供時代は、自然是観察の対象ではなく、遊びの相手であり、今にして思えば、遊びの中から多くのものを学び取ることができました。

親と子の自然観察会は、時間的にも、内容的にも十分なものではありませんが、観察会を通じて感じたことは、親も子も自然の付き合い方を意外と知らないことでした。

木や花の名前は、本により簡単に知ることができます。それらがどのような環境で育ち、どのように私達の日常生活に役立っているか、そして彼等とどのように付き合って行けばよいのかを知るには、自然に直接触れ、身をもって知ることが最良の方法と考えます。

東三河支部 戸河里光雄

自然観察指導員という名をいただいて 5 年を経ました。自然観察会を行うというのが主な活動でありました。東三河支部のもの、県委託のものなどもやらせていただきました。観察会での内容・指導法も未熟で、人にものを言うなんて口はばつたいたですが、思っていることを述べさせていただきます。

観察指導にあたる人が限られてきているのが残念です。指導員の資格を持っていて参加されたことの無い人やしばらく参加していない人もいます。指導することは大変ですが、少しでも顔を出してもらえるとうれしいですね。そうすれば自然保護への色々な意見交換などができる、お互いの意識を高められるような気がします。

また、 N A C S - J のように一般会員の募集をすると良いと思います。私達の身近にも自然環境の破壊等に不安を持っている人が多くいます。でも、その中の何割かは、何かしたいけれど、どこで何をすればいいのか分からぬでいるようです。そういった人達を巻き込むのです。私達の会がもっと有名になるし、資金面・発言面でも活動し易くなるのではないかでしょうか。多々の問題はあると思いますが、一度考えてみてほしいですね。

最後に、身近な自然環境の保護について考える場としていきたいと思います。私が協議会に入会した以後の 5 年間でも、辺りの自然環境は大きく変化しています。子ども達と一緒に歩いた山も削られゴルフ場の練習場となってしまいました。このように、いつの間にか計画・実行されている工事などがあります。こうした環境問題について、

一人ではどうすれば良いのか分からぬことが多いります。それらの問題を考える場にこの会がなってくれるといいですね。私自身微力で何もやれていませんが、今後協議会の一員として協力していきたいと思っています。



みんなが参加し、意見の交換 できる連絡協議会へ

尾張支部 山田 博一

登録者が300名を越えているのに、実際に活動されている方は二割強である。他は、別の自然観察会で活躍されているか、登録されているだけである。今後もっとたくさんの会員の参加をしてもらうにはどうしたらよいでしょうか。

①自然観察会は参加することに意義がある。……愛知県自然観察指導員連絡協議会の「指導員」という名にとらわれないで欲しい。自然観察会は実際、ハイキングや子供連れの山歩きに植物・動物の勉強会が付随したようなものです。とくに今まで参加されていない方こそ気楽に参加して下さい。参加されたら少なくとも一つ、素晴らしい出会いがあるはずです。また、会費を単なる機関誌の郵送料だけにしておくのはもったいないと思います。

②ジュニア（次の世代）を参加させて下さい。…子供は胸を時めかせて自然に入り、触ったりつかんだりして、じかに自然と接します。自然に触れ合うことにより、感受性を高め、たくましさを身につけ、健全に育っていきます。そこで我々は、かけがえのない自然の大切さを教えましょう。

彼等が、明日の日本の自然を守る世代になってくれるよう育てましょう。テレビとテレビゲームだけでは将来の自然保護を考える者は育ちません。

③会員以外でも遠慮なく連絡協議会の活動に誘いましょう……本会の自然観察会等は、一般の人には自然観察の面白さを知ってもらう絶好の機会です。また、パンフレットなどの出版物も興味のある人に紹介してあげて下さい。結構、好きな人がまわ

りにはいますよ。

④「連絡」を密にして下さい。……愛知県自然観察指導員連絡協議会は意見の交換の場です。会員は、総会や、手紙、電話等でもっと色々な意見を交流して下さい。また、会員相互の情報交換をもっとすすめて下さい。せっかく指導員講習会等で知り合ったこの出会いですから、大事にして下さい。また、指導員講習会で指導員になられたあと、別の会を作られた方、愛知県自然観察指導員連絡協議会以外の観察会に参加されている方はぜひその活動内容を紹介して下さい。たとえ観察会の日時が重なっていても情報を交換しあうことが活性化につながります。

我等の協議会を有名に

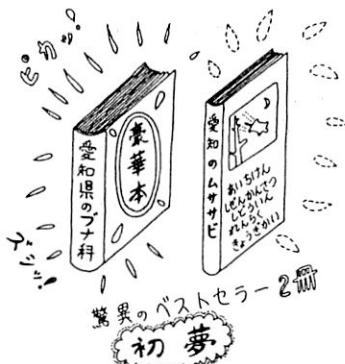
尾張支部 北岡 明彦

過激なタイトルをぶち上げてみました。その心は、有名になるにはそれだけの実績をあげなければならない → 会員が一丸となって努力する必要がある → みんなで頑張ろう！ということです。

観察会を中心とした地味で地道な活動こそが、私達協議会の真の姿です。しかし、どうもそれだけでは限界があるような気がしてなりません。もっと対外的・一般的・専門的な評価を高めないと、いつまでたっても愛知県自然観察指導員連絡協議会はマイナーな存在のままでしかありません。300名の会員の中には、各分野の専門家が多数いるのに、その力が一向に結集できないのは、本当に歯がゆくてしかたありません。会員ひとりひとりがもう少し、自分の得意な分野で自分の力に応じて協議会の諸活動に参加していただきたいのです。

私としては、現在進行している「ブナ科樹木分布調査」と哺乳類分布調査のうち「ムササビ調査」を何とかしてとりまとめ、社会的な評価を得られるような冊子にまとめて印刷物にしたいと思っています。どちらの調査も今まで一度もまとめられたことはなく、現在手元にある調査記録も大変興味深いものがあります。しかし、全県調査としてまとめるには、まだまだ細かい調査が必要で、問題点も山積しています。

ブナ科分布
調査の参加者
はやっと28人
に達し会員の
約1割が参加
したことにな
ります。調査
か所は、全
5,000か所の



うち1,600か所(32%)となり、目標の50%まではまだ多くの会員の皆さんのがんばりが必要です。

「愛知県の自然に関することは何でも協議会に聞け」そんな話が一般的になる日を夢みて、会員の皆さん、頑張りましょう！

協議会ニュースを考える

東三河支部 神戸 敦

ひょんなことから御鉢が回ってきて、今年度から協議会ニュースの編集をすることになりました。編集上の考え方の一端を述べて見たいと思います。協議会も10年を経て、「協議会ニュース」も充実発展してきました。質の高い内容・会員相互の

意見の交換の場として、会を支えてきました。多くのすばらしい特徴がありますが、今後の発展のためにあえて弱点を挙げるなら、……①なかなか定期発行できなかった。(もちろん原稿を書く側の私を含めた会員にも責任はあることは言うまでもありません。)、②発行回数が少なく、内容のニュース性が乏しい。……があると思います。

それらを充実するため、今年度から年6回、奇数月1日発行とし、将来的には毎月発行としたい。日常活動は支部中心なので、支部に関する記事を豊富にし、支部・会員間の交流の一助としたい。研究的内容面が乏しくなるので、年度末に年報的な「愛知の自然観察(仮称)」を発行し補いたいなどと考えています。細かな仕事は多々ありますが、要は皆様の御協力と私の体力で編集していきたいと思います。よろしくお願ひします。

* * * *

平成3年度は、協議会の組織充実のために、運営委員会の中に「普及」・「調査」・「編集」の各担当を新たに設けて効率的に事務を進めることとしていますが、山田博一、北岡明彦、神戸 敦の各氏はそれぞれの担当の代表として活躍していただく予定です。

愛知県自然観察指導員連絡協議会の沿革

- 55.10 第1回自然観察指導員講習会
(鳳来町県民の森)
- 56.4 愛知県自然観察指導員連絡協議会設立
(会員 約60名、会長 大竹 勝)
- 56.10 第2回自然観察指導員講習会
(犬山市継鹿尾)
- 57. 各支部設立(名古屋東、名古屋西、尾張
知多、西三河、東三河、奥三河)
- 57.8 機関誌創刊号(手書きで)
- 57.10 第3回自然観察指導員講習会
(足助町いこいの村愛知)
- 58. 協議会主催の自然観察会始まる。県受託
観察会開始
- 58.10 第4回自然観察指導員講習会
(鳳来町学童農園)
- 60. 県から「自然観察の手引」作成受託始まる
- 60.6 自然観察指導基本方針策定
- 60.6 機関誌の印刷始まる(12号)
- 60.10 第5回自然観察指導員講習会
(鳳来町県民の森)
- 62.10 第6回自然観察指導員講習会
(瀬戸市定光寺)
- 1.9 第7回自然観察指導員講習会
(鳳来町県民の森)
- 2.9 協議会設立10周年大会
(名古屋観光会館)

他府県の連絡会の状況

—アンケート結果から—

会が発足して10年になりますが、その間調査結果のとりまとめの不十分さ、機関誌の遅れ等幾多の問題点を残してきました。そのため、平成3～4年度にかけて事業執行体制の充実を図るため、組織の見直しを進めていく予定をしています。

そのため、他府県の連絡会の状況をも参考にしたいものと、今回アンケートを実施しました。回答していただいた県は23都府県で、その状況を次にまとめてみます。

アンケートが返送されるのを拾い読みしているうち、いずれの県もいくつかの課題を抱えていることから、私達の活動が如何に困難なものか考えさせられました。

自然観察指導員の会の特徴の一つは、会が同好の者の盛り上がりによって作られたものではなく、県なり自然保護協会という組織により言わば上から作られたものであることです。自然の大切さを伝えたいという気持ちは、全ての会員の願いであるとしても、その力を一つにまとめるとはなかなか困難なことです。特徴の二つ目は、活動分野が植物なり昆虫・野鳥という特定の分野に限定されていないため、会員の関心と会の活動が一致しないことが見受けられることです。特徴の三つ目は、特定の対象を持った保護活動と違って、やや抽象的に自然の大切さを訴える活動になりやすいことです。特定の運動であれば、会員の意思を結集しやすいのですが、私達の活動は対象が幅広いだけに内容がともすれば散漫になってしまう傾向があります。

こうした条件の中で、長い活動を続けることはなかなか難しいと思われます。10年を契機としたりして、会の組織や運営を見直そうとする会も多いようですが、問題の解決には時間がかかるものと思われます。

では、アンケートの結果を順に見てみましょう。

1. 連絡会の状況

(1) 設立年

設立年	府 県 名	設立年	府 県 名
昭和46年	福島（前身あり）	昭和59年	長野
昭和54年	群馬	昭和60年	香川
昭和55年	山形・富士・神奈川・滋賀	昭和61年	秋田・埼玉・山口・宮崎
昭和56年	青森・（愛知）	昭和62年	鹿児島
昭和57年	宮城・新潟・東京	昭和63年	高知
昭和58年	京都・長崎・千葉	平成元年	三重・福岡

(2) 会員数

会員数	都 府 県 名
50～100名	青森・宮崎・東京・富士・長野・三重・京都・香川・高知・福岡・宮崎・鹿児島
100～150名	福島・新潟・群馬・千葉・滋賀・山口・長崎
200～250名	秋田・山形・埼玉
300名以上	神奈川・（愛知）

(3) 会費

金額	府 県 名
3,000	京都・富士
2,000	青森・宮崎・福島・千葉・神奈川・長野・滋賀・山口・香川
1,500	新潟・東京・鹿児島
1,000	秋田・群馬・埼玉・三重・高知・福岡・長崎
500	山形
なし	宮崎

2. 組織等

(1) 運営

- 理事会で協議して進める(2)
- 会長・事務局で会の行事を企画・実施(2)
- 事務局が中心で活動(2)
- 事務局を担当に分けて運営(1)
- 幹事会・事務局が中心で運営(1)
- 幹事会（会長・各支部代表等）で企画運営を行う(3)
- 役員・幹事（21名）で運営（1）
- 運営委員会（役員・支部代表・事務局）で行う(2)

- 運営委員（10名、役員は委員の互選）で進める(1)
 - 会長等と運営委員（10人）で運営(1)
 - 役員が月2回の室内例会に集まり企画・運営を行う(1)
 - 分野別の世話人会（8名）により運営(1)
 - 毎月の定例会で検討(2)
 - 会長等の役職を置かない(2)
- (2) 支 部
- 有(9) 無(14)
 - 支部主体の行事を行うよう呼びかけている(1)
 - 会から支部へ分配金を出している(2)
 - 観察会、保護活動等の事業は支部で実施。会は研修等を行う(3)
 - 会は、支部の集合体(1)
- (3) 運営上の留意事項・問題点
- 〔運営上の留意事項〕
- 支部の独自性を尊重する(2)
 - 行事の地域配分に留意している(1)
 - 会を長く持続するため、会員の楽しみの要素を重視(1)
 - 会員向け行事と対外的行事を車の両輪としている(1)
 - 会員の中で「教える・教えられる」の関係を作らない(1)
 - 他の保護団体等との共催事業・交流を図っている(1)
 - シンプルに、形式主義に陥らないように(1)
 - 会員の参加を増やすため、新入会員を中心にこまめな案内をしている(1)
 - 自然観察指導員とその他の会員の間の認識の違いに留意している(1)
 - 「相談をしながらやっていく組織」(1)
- 〔問題点等〕
- 県域が広く連絡等が十分できない(2)
 - 県域が広く行事の実施に地域的配慮をしている(1)
 - 活動が特定の地区に集中する(2)
 - 地域に分散した会員は、活動しにくい(1)
 - 支部毎の活動状況に差がある(1)
 - 行事に対する会員の集まりが悪い(8)
 - 会員の年齢の高齢化(1)
 - 会員の活性化と実働メンバーの充電が必要(1)
- 会の活動が停滞気味で、組織の活性化が望まれる(1)
 - 会員の活動状況を把握していない(1)
 - 特定の人に事務が集中する(2)
 - 事務体制が不十分で行事がうまく実施できにくく(2)
 - 活動規模を増やしたため、事務の負担が大きい(1)
 - 事務の遅延が目立つ(1)
 - 活動資金が足りない(2)
 - 継続することに全力を集中(1)
 - 自然保護思想の普及から一步進んだ活動を求めているが、方針がまだ出せない(1)
3. 事 業
- (1) 事業実施上の方針等
- 指導員の資質の向上・自然保護思想の普及等を目標(6)
 - 自然観察会・研修会・指導員養成講習会を3本柱とする(1)
 - 自然観察会・調査・研修・機関誌(1)
 - ボランティア活動に徹し、個人の報酬は受け取らない方針(1)
 - グローバルな視野にたって、ローカルな活動を(1)
 - 自然保護教育を目的とし、自然保護運動は行わない(1)
 - 正しい自然観察の普及(1)
 - 自然から学び・自然と暮らしの発見(1)
 - 会員制の子供観察会を実施(1)
 - 会員相互の連携と資質向上を図る(1)
 - 役員・支部間の連絡をよくする(1)
- (2) 自然観察会
- 〔開催状況〕
- 会 主 催：無(0) 1～2回(3) 3～5回(8)
6～9回(5) 10～15回(3) 23回(1)
30回(1)
 - 県等の受託：無(6) 1～2回(6) 3～5回(5)
6～9回(1) 10～15回(1) 23回(1)
 - 派 遣：無(6) 1～2回 3～5回(12)
6～9回(1) 10～15回(8) 20～25回(1)
 - 全 体：5～9回(9) 10～14回(10) 20回(1)
35～40回(2) 63回(1)

〔方針〕

- 自然のしくみや大切さを重視、名前だけに終わらぬよう(1)
- 自然保護思想の普及を中心とし、小さなものが多く行う(1)
- 個々の生物の解説でなく、その土地に根ざした全体的なとらえ方を(1)
- 身近な場所で人と自然のかかわりを重視し、環境問題も取り上げたい(1)
- 企画・運営を多くの人で行うよう努力している(1)
- 観察会・下見等を研修の場と考える(2)
- 指導分野を広げる(2)
- 身近な場所での実施(1)
- 子供を中心とした観察会を積極的に行う(2)
- 体の不自由な方との観察会が課題(1)
- 全ての市町村で観察会を行うように働きかけている(1)
- 開催要望が多いため、「友の会」を発足させた(1)

〔問題点〕

- 実施場所・時期が特定している(1)
- 指導員が固定しやすい(5)
- 指導員の資質向上が望まれる(2)
- 指導員の住所・職業により参加が限られる(1)
- 委託の観察会は指導員不足で、会主催では参加者不足(1)
- 参加者が少ない又は減っている(5)
- 実施体制から拡大は困難(1)
- 実施する場所により参加者数が著しく変わる(1)
- P Rが不十分で、参加者が特定する(1)
- 新聞等では不十分でP Rの手段を検討する必要がある(1)
- フィールドの交通が不便(1)
- 観察会のマンネリ化を避けるための工夫が必要(3)
- 名前にこだわる観察会になりやすい(1)
- 参加者の年齢層が厚いので焦点を絞りにくい(1)
- 財政的に無理が生じ、完全なボランティアのままである(1)

〔機関誌〕

〔発行〕

年12回(4) 年10回(1) 年6回(6) 年4～5回(5)

2～3回(2) 年1回(3) 不定期(1)

③ 会員以外の配布

有(10) 無(10)

◦マスコミ等(3) ◦研修会の依頼講師等関係者(1)

◦他の団体(4) ◦一部観察会等で実費有料配布(1)

〔内容等の留意点・問題点〕

◦年1回のもの、毎月～2カ月に1回のものの2種類発行(3)

◦始めは意見交換を目的としていたが、今はテーマを決めたりして発行(1)

◦原稿が特定の者に片寄らないよう配慮(1)

◦公平中立な立場で、かつチェックしない(1)

◦身近なニュースを中心とする(1)

◦各支部の活動状況を中心に編集(1)

◦他団体の観察会等を学習情報として掲載(1)

◦会員以外からも原稿の寄稿を多く行っている(1)

◦内容の多様性に留意(1)

◦多くの立場からの発言を期待している(1)

◦意見発表、討論等により、会員の自己啓発に役立つ場にしたい(1)

◦楽しい読みやすい紙面作りが目標(1)

◦事務局体制不備のため発行が遅延する(5)

◦会報は休刊状態で、別に連絡誌を出している(1)

◦会員の原稿が集まりにくく(6)

◦行事計画の掲載が立案と発行のずれにより難しい(1)

◦行事関係の記事が増え、会員交流の場にならない(1)

◦会員が個々にかかえている問題点をどのように掘り起こすかが課題(1)

◦自然情報が少ない(1)

〔4〕 その他の事業

◦研修会の実施(新潟・群馬・東京・神奈川・山口・香川・鹿児島)

◦年数回の1泊研修会を実施(千葉)

◦肩のこらない研修会を多くするよう努めている(秋田)

◦各支部主催の研修会(宮城)

◦毎月定例会(研修・打合)を行っている(香川)

◦フィールド調査の実施(青森)

◦学校行事・子供会行事への参加(宮崎)

◦雪上観察会(福島・京都)

- 都市域の斜面林調査を実施中（東京）
- クサフグ産卵調査（山口）
- クマゲラ調査（青森）
- 年輪調査（埼玉）
- 環境庁の生物調査に会の視点を加えて一斉調査を実施（東京）
- 他の自然観察等を行っている団体との交流を検討（三重）
- 「自然観察の森」行事への指導員派遣（滋賀）
- 自然観察会案内のテレホンサービス（滋賀）
- 県・町からの受託で自然観察マップの作成（青森）
- 受託により自然に関する施設のガイドマップ等作成（滋賀）
- 自然観察参考資料集（第2集）計画中（新潟）
- ネイチャーフォート展（青森）

4. その他の取り組み等

- 指導員講習会の実施（鹿児島）
- 事務局体制の見直し（山形）
- 事務局体制の見直しを検討中（山形）
- 事務の集中を避け、FAX、パソコン通信等の導入を検討している（神奈川）
- 事務局・編集担当に地域制導入を検討（新潟）
- 会の運営方法を再検討する予定（秋田）
- 会と会員のつながりを深める（新潟）
- 常時活動できる会員の増加を目指す（宮崎）
- 会の運営が特定の会員に集中している（高知）
- 会員数増加に反して会の活性が低下傾向にあり、話し合いを予定（東京）
- 支部の作成と地元に根ざした活動を考えたい（秋田）

- 支部活動の充実（福岡）
- 10周年を契機に、今後のあり方を委員会を設けて検討している（滋賀）
- 他の会との連携を密にしたい（宮崎）
- 自然保護に関する情報の把握に努めたい（宮崎）
- 「京都の自然観察地ガイドブック」の作成（京都）
- 10周年記念として「ふるさとの自然」発行予定（青森）
- 「会の10周年記念誌」の作成
- 尾瀬・裏磐梯の環境調査を重点的に実施したい（福島）

- ネーチャーゲームへの取り組み（福岡・鹿児島）
- 展示会の実施（福岡）
- ゴミ問題・リサイクル等の環境問題に取り組みたい（山口）
- リゾート・ゴルフ場・スキー場などの問題について検討する必要がある（山口）
- 城山をフィールドにした環境学習を進める。（鹿児島）
- 社会教育機関にボランティア団体としての登録をする（埼玉）
- 各地域で観察会や研修会を行う実力を付けていく（埼玉）
- 県内の観察会の状況を、組織と人との両面から捉える（埼玉）
- 友の会を作り、底辺を広げる（神奈川）
- エコロジー・本の出版・情報・調査・研修・地域等のプロジェクトをつくり、今後10年にこれらの活動を推進し、会員がどこかで活動するようにする（神奈川）



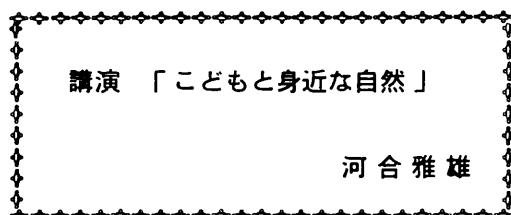
協議会10周年記念大会から

—講演とミニ討論会の内容—

平成2年9月9日に名古屋観光会館で、協議会の10周年記念大会が行われました。その概要については前号でお知らせしましたが、今回その時の河合雅雄先生の講演とミニ討論会の要旨について

まとめてみました。

なお、とりまとめはすべて事務局で行いましたので、講師や発表者の趣旨と若干異なる可能性のあることをご承知ください。



私は、子供の問題には大きな関心を持ち続けてきました。最近、子供を取り巻く環境がどんどん人工化し、家族ですら人工化しているというのが現代の大きな問題です。今は、物質的には豊かな社会になりましたが、それだけにいろいろな問題も起こってきています。

人間と動物は連続していますが、かなり違う面もあります。人間と動物の違うところはいくつかありますが、その一つは人間は幸福を求める動物であることです。

昔は、貧しくても心が豊かであれば幸福になれるという人もいましたが、そういうながらも物質的な豊かさも必要でした。要はバランスの問題なのです。しかし、自然科学の発展により、物と心のバランスが壊れて、物質的な豊かさを求めることが目的になり、現代ではそれは達成されました。ところが今、心の豊かさが改めて問題となっています。このように物がいっぱいある中で、人間がどのように心豊かに生きるかという問題は、人類が今までに考えたことのない問題なのです。

物が豊かになったために、物質生産が過度に行われるようになって、いろいろの問題が生じてきました。その一つに公害があります。しかも、環境問題は、ヨーロッパのライン川に見られるように、多国間の協力を要する問題となり、さらに地球の温暖化、酸性雨、熱帯雨林の破壊など地球全体が危機にさらされているといつてもよいような

状態になってきています。

私が経験した、熱帯雨林を例にしますと、熱帯雨林には、地球上の全生物約130万種のうち半分が存在し、昆虫は1,000～3,000万種もいるかと推定されています。また、シロアリや土壤生物が豊富で分解速度も早く、森の更新が活発に行われています。こうした熱帯雨林も一度伐採されると、大雨により栄養分を含む表面の土が流されて、不毛の土地に変化してしまいます。一度破壊された熱帯雨林の回復がいかにもつかしいかは、アメリカのベトナム戦争で枯葉剤を使用された土地が証明しています。

環境破壊という問題は、人間が背負った宿命、業のようなものであるという感じがします。

始めは絶対安全と言われたフロンガスですら、誰も考えなかつたオゾン層破壊という深刻な問題を引き起こしています。地球が生成してから46億年といわれますが、自然は壮大な年月をかけて生物たちが生きていけるような環境を作ってきました。従って、自然そのものの中には基本的な危険性はないものといえます。しかし、人工的に作られたものについては、絶対安全という保証はないのです。常に危険をはらんでいます。これが私の基本的な考え方あります。人間は文化を持ったために繁栄してきましたが、人間の作ったものには必ず良いところと悪いところがあり、常に悪の陰を引きずっていると考えねばなりません。

次に、人間と他の動物と違う点として、人間には自己破壊という性質を内在的にもっていることです。自分が自分を殺す、自殺というようなことは動物にはありません。また、人間は戦争を長い歴史の中で幾度となく経験していますし、現に今でも起こってもいます。これは人間の背負った不

幸と言えます。しかも、現在は人間のもつ500万年か600万年もの歴史の中で初めて、人類全体が滅びるかもしれないという恐れを持った時代になっています。我々は、そういう時代に生きているのだという認識が必要なのです。

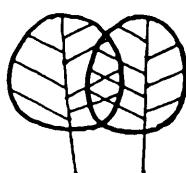
最近、私はペッファーというアメリカの女性精神医の「死にいそぐ子供たち」という本を興味深く読みました。アメリカにおいては1960年ころより子供の自殺が増加し、その原因の第一は家庭の不和であるといいます。子供には死という概念がわからっていないので、本当には死にたいとは思わないはずです。しかし、現実が子供たちにとってどうしようもないことから、一時的な隠れ家のようなつもりで、死の世界へ逃避を図るといいます。けれども、死から戻ることはできないのです。

さて、我々にとって自然是なぜ大切なのかという基本的な問題について考えてみましょう。緑を見ると心が安らぐとか落ち着くとかいわれますが、それはいったいどういうことでしょうか。

哺乳類は、その多くが陸上に住んでいます。陸上には森という3次元の世界がありますが、その森に住み付いていったのは、人間の祖先のサルだけです。分類単位の「目」としては、サルだけが森を住家としたのです。サルは、6,500万年ほど前に出現したとされていますが、それ以後森の緑の空間の中に住み続け、その中で進化してきました。3次元の緑に囲まれて、そこに適応してきた動物であるといえます。そのサルの生を支えてきた緑が、我々人間にも組み込まれていると私は思います。

人間の歴史は500万年前ほどありますが、人間は生まれたときから、狩猟と採集で暮らしてきました。そんな時代がおおむね499万年続き、その間人類は自然の中で自然とともに生きてきました。やがて、人間は農耕と牧畜を始め、それによって人間は大量の食料を手にいれるようになります。農耕が始まると世界の人口は300万人ほど

と言われていますが、それが短い間に3,000万人にも増えます。そして、都市国家ができ、さらに技術の発展等により、今では50億人



余の人口に増えました。新しい生産技術を手に入れるのは素晴らしいことですが、それとともに人間は多くの問題も抱えることになりました。人間の業なのです。

499万年の間、自然の中で生物として生きてきたことにより、我々の心も体も社会も自然の中で自然との対応でできてきたのであり、それを私は「内なる自然」と呼んでいます。自然に対する気持ちちはふるさと意識みたいなもので、人間存在の底辺を支えるものなのです。

自然の中にいる時のやすらぎとか楽しさとか、そういう気持ちを子供のときから大切にしたいと思うのです。けれども、自然の中に入るというと、今はすぐ理科教育になってしまいがちです。子供が自分で自然を体験する、自然を肌で感じるような機会を与えていきたいと思うのです。幸い、日本は自然の豊かな恵まれた国です。子供たちに、そうした日本の自然の美しさなどを感じる感性を持ってほしいのです。魚釣り、泥遊びなど、子供は本来好きなものです。自然を仲間にして、子供たちは自分たちの世界を作っていくものです。特に、小学生の時期は大事な時であり、子供一人ひとりの個性を大切にしながら、彼等の感性を育てる場を与えてやりたいものです。

ミニ討論会 「身近な自然の活用」

司会：浅井聰司

発表者：金森正臣（愛知教育大学）

大竹 勝、竹内秀代

討論：相地 満、間瀬美子、松尾 初

1. 発表

〔金森正臣〕

始めに、先天的に持っているものと、教えるものについて考えてみたいと思います。

例えば、河合先生のお話にあったように、子供たちは本来緑が好きです。これを育てるのは楽ですが、これを打ち消して黒を好きにならせるのは、不可能なことではないが無理があり、またできて

も子供を少しおかしくさせます。素直にもつているものを育てることは楽であり、本人にも幸せなことがあります。

子供にとって自然の中で、ある限られた期間までに体験する事柄は、その後の人生に大きな影響を及ぼします。

例えば、小学生を外へ連れて自然に触れさせる場合、この間の、小学校3～4年を境に大きな違いがみられます。5～6年生ですとなかなか川の中などに入らない子が数人はいるものですが、低学年では喜んで入っていきます。低学年の中には泥水に入るなどの経験が1回でも行われていると、その後はそうしたことに対応できるようになるとともに、実際に体験した事柄以外にも対応が広がります。そういう意味で、原体験が非常に大切であり、しかもそれを受け入れる時期があるようです。

また、感情を育てる場合も、たくさんの経験が必要であり、しかも筋肉のトレーニングと同じように長い期間をかけて育てる姿勢が必要です。そのようにして感情を育てることが、将来の幸福観、幸福を感じられる人になれるかどうかにつながっていきます。その際に自然が大きな役割を持つと考えられます。

社会性を身につけること、他人に対して気配りをする心は、子供の時の集団での遊びの中で身につくものです。集団の中で子供どうしの交流を通じて育てられます。そして、子供が集団を作るには自然の中が適しているのです。そのための場として、身近な自然は大切なものです。

さらに、身近な自然と触れ合うことにより、子供たちが大人になったとき、環境が壊れたりすることをどの位残念に思うかという、自然や環境に対する心を持つことができるようになると考えられます。自然を残すことが子供たちの自然観とも関係してきます。気になるのは、農耕地などごく身近なところで、コンクリート張り等によって、生物の住めるような環境が失われつつあることです。

〔大竹 勝〕

自然教育は、学校教育と違ってシナリオがないのが特徴です。情報を相手にするのではなく、実

際に物・対象がそこにあることから出発することが大切です。しかも、その対象が季節、天気、時間などにより変化していることを理解させたいものです。

私たちの子供時代は、自然の中での遊びから多くのものを吸収していました。子供に関する管理が強まっている中で、また室内での遊びが中心になっている中で、子供に観察会で何を伝えるかを考えますと、昔のガキ大将の役割を指導員がつとめる必要があると思えます。

様々な機会をとらえて、自然との出会い、その中から生まれる感激を大切にすることが子供の将来にとって必要です。そのためには、自分の目で見たことが出発点であることを理解させたいものです。与えられた知識で判断するのではなく、自分の実際の経験で考えることが重要なのです。また、自然と自然物とは異なること、自然の中では全ての生物が係わりをもって生きているのだということを理解できるようにしたいものです。

人も自然の中の一員、人間の作ったものだけで生活することは不可能であることを知って欲しいと思います。

〔竹内秀代〕

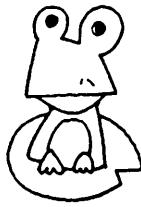
幼稚園や学校で教育に携わった経験から、子供が興味を持つものについてお話ししてみたいと思います。

勤めていた幼稚園では、散歩に力を入れていたのですが、その際にどの年齢の子供も関心を示すものはドングリ、カタツムリ、ダンゴムシなどです。女の子は一般に、始めは虫や汚れたものを嫌いますが、男の子は割と平気です。しかし、周囲の人が平気で扱うことによって慣れてきます。

そうしたものとの遊びの中で、子供たちは自然に、虫などがどんな場所にいるかとか、どんな特徴があるかとか、あるいはザリガニなどはさみを持ったものの扱い方も覚えていきます。

また、カメ、クワガタムシなどの動く小動物は子供たちに人気が高いのですが、遊んでいる間に狭い場所ではかわいそうだから逃がそうとする意見などもでできます。

タンポポ、ツクシ、クローバ、木の葉などの植物を使っても子供たちは豊かに遊びます。クロー



バなどの原で転がって、全身で植物にさわって戯れることも子供たちは大好きです。

自然には、子供たちの遊ぶ能力を引き出すものが、子供たちの内に持っているものを引き出す力があるように思えます。教室の中でも外でも、自然のものを使って、とてもいい顔をしながら創造的に遊ぶ子供たちの姿が印象的でした。

2. 討 論

〔司会〕 始めに、発表者以外にご参加いただきました3名の方にも少しづつご意見をいただきたいと思います。

〔間瀬〕 竹内さんのとっても幸せな子供たちのお話を聞いていてうらやましいと思っています。今は、せっかちに答えを求め過ぎる傾向があるように思えます。小さな子供では、理屈抜きに自然の中へ入れてやることが大切です。自由な形で子供と自然が接することができればと思っています。

〔相地〕 今の自然とか教育、社会について考えると頭を悩ますことが多いのは確かです。

私の場合、児童館で自然観察クラブをつくり、3年間に42回、延べ2,000人参加の観察会をやってきました。観察会ではなかなか参加者が集まらないときもありますが、人が集まって困る観察会もあるのです。

私の日頃考えていることの一つは、自然は無言の教育力をもっていることです。それを借りなければ人間にはなれないだろうと思います。二つ目は、観察の方法として、分析的に見ていくのではなく、総合的に見ることです。特に、自然観察は感性を育てていく仕事であり、自然を美しいと思う心を育てていくことが大切です。三番目は、文化は自然をどのように解釈するかの現れであることです。文化の根底を流れているのは、人間の持っている自然認識だと思います。

今の文化が持っている、人間が持っている悲しみに対する切ない気持ちがあって、自然観察の目が開けてくると思います。

〔松尾〕 子供の頃から山や川で遊んできましたが、ただ遊んでいただけです。そして、それが大切なことのように思います。学生の頃、自然保護

とは人間の情緒の問題だと考え、それを自分の生活にそれを取り入れてきました。

今、自分の子供と川などへいっても、放っておくだけです。子供は自分で、遊び方や自然に対する知識を見付けていきます。危険に対しても自分で対処することを期待しています。そうした身近な自然がたくさんあることが一番重要だと思います。

〔司会〕 それでは、どなたかご意見等を出してください。

〔松尾〕 自然観察会にたくさん子供を連れて歩いて、本当に観察できるのか疑問を持っているのですが、皆さんはどうでしょうか。

〔大竹〕 観察会でよく教えるといいます、本当は教えるのではなくて、子供が自分で発見したものをサポートしてやるのが指導員の役目だと思います。子供たちが何を発見していくかを大切にしたいと思います。

〔金森〕 学校の場でも、特に低学年の子供は教えたことはなかなか身につかないものです。野外では、子供が見つけたものにのっかって、如何に子供の興味を引き出すかが大切です。そのためには、子供の数が多いのは難しいものです。

〔司会〕 自然観察などで、子供たちはよく虫などを捕ってきて、時には足を取ったりするのですが、その中で殺す殺さないという問題にどう対応したらよいか、生命の大切さをどう伝えるかお聞きしたいと思います。

〔大竹〕 命の大切さを教えるのは、ある段階では必要ですが、いつもかわいそうとするのも問題があります。個々の生物の生死だけでなく、生物全体としてとらえることも必要です。

〔金森〕 子供が取らまえた動物を飼いたいと希望した場合は、そうさせるように先生方にもお願いしています。生命の尊さについてわかるのはずっと先のことで、子供の時点ではまず生き物とたくさん付き合うことが大切だと思います。

〔間瀬〕 命が大切だということは、どこまで知っているか分かりませんが、どんな子もそう言います。しかし、生態系のサイクルの中での生死の意味を子供たちにわからせていく必要があると思います。

なお、虫の手足を取ってしまうという場合は、その子の精神的な不安定さが背景にひそんでいることがあります。

〔会場から（加藤）〕 学校などの生物解剖などでは、殺さざるを得ないものです。その場合でも、どのような殺し方をするか、どのような後始末をするかが大切になります。

〔会場から（山本）〕 自然が大切だということは多くの人にはわかっていることですが、自然を無視した開発がどうして起こるのか。また、そういう人たちが子供の頃には豊かな自然の中で遊んだはずですが、それが自然を壊すことを考える大人になってしまうのはどうしてかを考えてみる必要があると思います。私たちが自分の経験を観察会などで伝えるだけでよいのだろうか。

また、身近な自然についてですが、小さな子供の行動範囲に自然がほとんどないのです。今は都市的生活をして、室内の遊びのほうが楽しいと思う現実の中で、自然の方が楽しいという魅力を出せるかどうか考える必要があると思います。

〔相地〕 私の家の回りには土の出たところは、私の家の庭しかないけれど、そこで鳴く虫が11種類いますし、名古屋の街で鳴く虫の自然観察会をしたところ6種類が聞けました。都市の中でこそ自然観察をすることが必要です。貴重な自然だけでやるのが自然観察ではなく、人間生活とくついたところでやるのが自然観察なのです。

また、「良い子はここで遊ばない」という看板がよくありますが、そこでも子供は遊んでいます。例えばフェンスが張ってあっても、それに穴が空いているなら、そのフェンスは必要ないのではないかという考え方が必要だと思います。そういうことに粘り強く対応することが大切です。

〔金森〕 子供が大人になったときのことを考えると、自然の感覚を養うだけではやはり問題もあります。地球環境を考えたときに最も問題になるのは、人間の自己欲です。それをどのように抑えられるか、自分の心をどのようにコントロールできるかの問題が大きく残っています。

〔会場から（吉川）〕 公園などをつくる場合、安くしかも早く作らねばならないという課題があると聞きます。自然に配慮した公園をつくるため

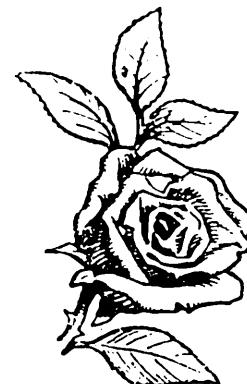
には余分に費用がかかるという状況に対して我々に何ができるだろうか。

〔会場から（加藤）〕 学校に雑草園とか学校林を作つて、地域の観察の場とすることもよいと思われます。

〔司会〕 それでは、最後に金森先生にまとめていただいて終わりたいと思います。

〔金森〕 感想を述べさせていただきますと、皆さんが非常に広い範囲に亘って、基本的なことを考えているのに感心しました。こういう皆様が活躍されているのを見て、愛知県も希望がもてると思いました。

自然観察は、多岐に亘り奥が深いもので、人間の内面にも係わる要素があります。また、指導者のパーソナリティによって伝わる内容も異なり、対象となる自然自体も多様であることから、様々な方法が考えられますので、今後もこうした巾広い議論が進められますよう期待しております。



身近な森・海上の森を残したい

(尾張支部 北岡由美子)

“海上の森”、といつても、聞いた事のない方がほとんどだと思いますが、知る人ぞ知る“21世紀万博の予定地”で、瀬戸市海上町にあるので、通称“海上の森”と呼んでいます。その名の通り、頂上から海のみえる山もあります。

愛知環状鉄道山口駅から歩いてわずか30分程度で広い雑木林に接する事ができ、今ではテレビか写真でしかおめにかかれないような、しかし私達が子どもの頃にはごく身近にあったものがそっくりそのまま残っている。故郷を想わせる雑木林……それが海上の森なのです。

I 海上の森とは

ここは、四季折々の変化がとても美しいコナラ・アベマキの雑木林です。

早春には、マスサクが山裾を飾り、ショウジョウバカマ・チゴユリ……と春だけなわとなれば、田にはレンゲが咲き、山にはワラビやキイチゴ類がたくさんあり、毎年多くの人が春ともなればここを訪れます。夏には、ゲンジボタルが飛び、子どもたちがムシ採りに夢中になります。ノコギリクワガタ・ミヤマクワガタ・カブトムシなどが、コナラ・アベマキの木にいっぱいおり、足で蹴れば、ポタポタ落ちてきます。秋ともなれば田の上をアキアカネが舞い、なんと、近くの「ものみ山」には、キキョウ・オミナエシ・クズ・ハギ等、秋の七草のだいたいがみられます。昔懐しいワレモユウやリンドウも道ぞいにはえ、木の実やキノコ・ヤマイモ掘りの人がたくさん山を訪れます。

II 残したい自然の概要

①世界中で、東海地方にしかない貴重な植物

シデコブシ・モンゴリナラ等

②湿地の植物

サギソウ・ウメバチソウ・モウセンゴケ等

③昔から親しんできた植物

リンドウ・オミナエシ・ササユリ・アケビ・
ヤマボウシ・ウツギ・ノカンゾウ等

④その他 センブリ等の薬草類、コブナグサ・コアカソ等の草木染に使用できる植物、果実酒にできる木の実等が豊富

⑤貴重な昆虫 ギフチョウ・ヒメタイコウチ・ムカシヤンマ・ヒメヒカゲ等

⑥豊かな自然を証明するもの（環境指標生物）
ミカワオサムシ・クロシデムシ・オオオサシ・サワガニ・プラナリア等

⑦古くから子ども達に親しまれている昆虫

ヘイケボタル・オニヤンマ・シロスジカミキリ・タイコウチ・クワガタムシ類・カブトムシ・トンボ類等

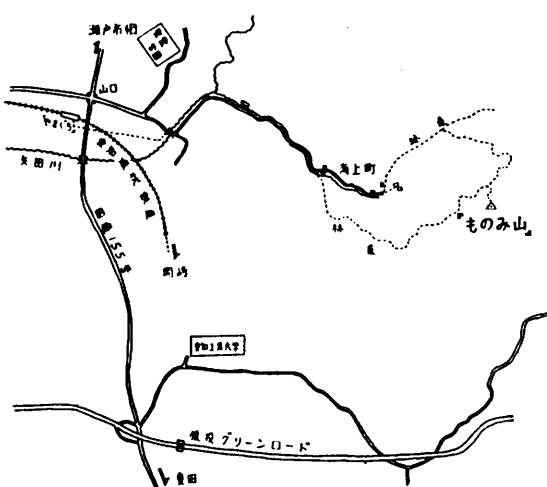
⑧ 野生動物

タヌキ・キツネ・イタチ・ノウサギ・リス等

9野鳥

オオタカ・ヤマセミ・カワセミ・サンコウチ
ョウ・オオルリ・キビヌキ・ルリビタキ・シ
ジュウカラ・エナガ・キクイタダキ・ツグミ・
ウソ・コゲラ・アオゲラ等豊富

⑩歴史　　海上の森にある“ものみ山”は、その昔、武田信玄が“物見”をしたといわれる所で、標高312mといえども、その眺望は素



海上の森位置図

晴らしい。頂上からは濃尾平野が一望でき、空気の澄んだ日には伊勢湾や名古屋港まで見える。その昔、ここから七つのお城（犬山城・小牧城・清洲城・岩崎城・挙母城・墨俣城）がみえたとかで、七城ヶ峰とも言われている。また、古来



私の好きなアケボノソウ

より歌に詠まれてきた“サネカズラ”“ホトトギス”なども見られて、文学散歩を楽しむこともできる。

III 身近な森を残そう

以上のように、海上の森にはまだ豊かな自然が残っており、現在ある豊かな自然、特に森林を少しでも多く子孫に残すのは、私達世代の重大な役目なのではないでしょうか。数え切れないほど多くの生き物が生息している豊かな森には、豊かな精神を育む力があり、反対に単純な森には、もはや単純な思考しか宿らないように思います。開発や人工林化が進み、天然の森がどんどん姿を消しつつある現在、海上の森が「万博」「東部開発ゾーン」のプロジェクトの中で、せめて今ある森林をそのまま活用するような施設、たとえば、"豊田市自然観察の森"や、豊かな森を中心とした"自然史博物館"のような形でも残れば、はかりしれない程貴重な財産になるのではと思います。地球環境という観点からみても、廃棄物などの物質的な環境問題とともに"森"を中心とした"こころの環境"の維持も大きな意味があるのではないかでしょうか。

私達は瀬戸市のみならず、県内に在住の方々が一人一人の問題としてこの事を考えて下さればと思います。愛知県の自然は、愛知県在住の者で残し伝えたいものです。

N ものみ山自然観察会

私達のものみ山自然観察会は、女性ばかり10人程がメンバーです。毎月の第2・4水曜日に、午前10時から海上の森で定期観察会を行なっています。昨年1年間で、50回以上ものみ山に登りました。

瀬戸市内に長く住んでいる人でも、登ったのははじめてという人が多く、身边にこんな山があったのかと驚かれる人がほとんどです。山道でノウサギに会ったり、緑のカーペットのようなウラジロの大群落に喜んだり、木の実を食べたり、野の花の可憐さに改めて魅せられたり、毎回新しい発見を楽しんでいます。

この山は1周するのに3時間ほどで、しかも、道はなだらかなため、幼稚園児からお年寄まで、老若男女の方が楽しめるほんとうに身近な山なのです。昨年は、のべ1,000人程の人を案内しました。

山で不思議な出会いがあったり、突然昔の思い出がよみがえったりして、森が、森に来る人を教えてくれるという感じがしています。このものみ山を愛する人が一人でも増えてくれればというのが、私達全員の願いです。

"海上の森"へ是非おいで下さい。四季折々の雑木林は最高です。定期的に観察会も行っていますし、日時を問わずに案内します。

連絡先 0561-84-2953

「ものみ山自然観察会」北岡宅



ムシカリ



ビナンカズラ(サネカズラ)



ガマズミ



(サンキライ)
サレトリイバラ

はくさん
白山の調査を終えて

尾張支部（岐阜県博物館）長尾 智

1990年7月23日から26日まで白山の調査を行った。白山は標高2,702mの御前峰を最高峰に持つ岐阜・石川・福井3県にまたがる山塊である。昨月8月に当館学芸員によって発見された恐竜の足跡が存在する手取層群は、この山の底辺を形成している。



白山の位置

標高1,260mの登山口へ、館の専用ライトバンで到着した3名は各々、野冊、ネズミトラップ、捕虫網等を背負って登り始めた。前回5月15～16日に来た時とは、景色がずいぶん違っていた。

白山の手前には大倉山（標高2,038m）がある。5月15～16日には、残雪に阻まれて、1,800mまではしか登れなかった。花をつけていた植物も数少なかった。

5月15～16日に花が咲いていた植物

木本

オオカメノキ・タムシバ・ブナ・イタヤカエデ・オオバクロモジ・マルバマンサク・アカヤシオ・ツルシキミ

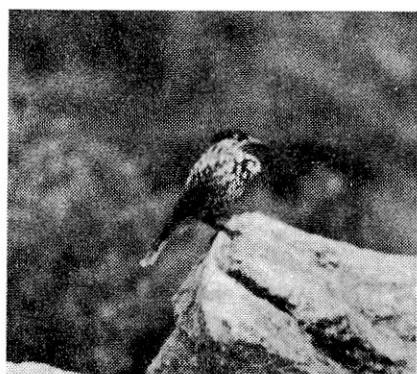
草本

イワカガミ・スミレサイシン・クルマバム

グラ・ユキザサ・オオバミゾホオズキ・エンレイソウ・フデリンドウ・ツバメオモト・オクノカンスケ

1,600mあたりからブナ林の中にダケカンバが混じるようになり、1,700mを過ぎるとほとんどダケカンバばかりの林になってしまった。典型的には落葉広葉樹林の上には、亜寒帯性の常緑針葉樹林が出現するのだが、多雪地帯では、雪の重みに耐えられない常緑針葉樹は姿を消していくのだそうである。ダケカンバにしても、根元の幹は彎曲し苦闊の跡がうかがえる。また、ダケカンバ林はブナ林に比べるとかなりまばらに生えているといった感じがした。

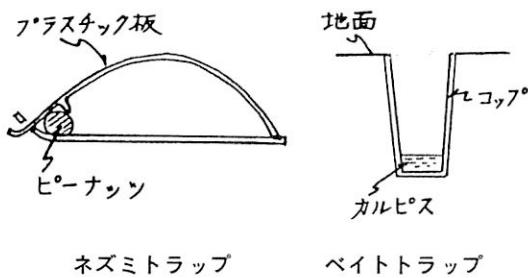
ハイマツの出現し始めた2,260m付近で、かなり大きな鳥が3羽ゆきゆきはばたきながら、頭上間近を一直線に飛んで行くのを見た。チョコレート色に白の斑点……ホシガラスであった。初めて見る鳥に高山へ来たという実感を深めた。



ホシガラス

この他に2種、私にとっての新種を発見した。カヤクグリとイワヒバリである。両種とも名前がよく習性を表わしている。カヤクグリは、ハイマツの樹間をせわしげに飛びかっていて、はっきり姿を見せてくれない。イワヒバリは岩の上に止まると、さえずりながらしばらくじっとしていてくれた。

2300mから2,450mまでの間にネズミトラップ(170個)とベイトトラップ(72個)をしかけた。ネズミトラップは、図のようなもので、餌のピーナッツをネズミがくわえて取ると、曲げられていた上のプラスチック板が伸びてはさみつけてしまうというしくみである。ベイトトラップは、プラスチックのカップにカルピスを5mm程注ぎ、地面すれすれに埋めたもので、カルピスの臭いにさそわれて落ちこんだ甲虫類等を捕獲するためのものである。夜間走り回るネズミや甲虫の姿を想像しながらせっせと作業を続けた。



息も絶え絶えに登る岩山での慰めといったら何といってもかれんに花開き、そしてたくましく生存し続けている草花である。白山にちなんだ名をもつハクサンコザクラなど種類も数も豊富であった。山小屋のある室堂(2450m)にはクロユリが群生していた。写真から想像していたよりも奥ゆかしく印象に残った。



クロユリ

7月23～26日に花が咲いていた植物
(トンビ岩コース・南竜が馬場・エコーライ
ンコースも含む。)

木本

アオノツガザクラ・ミヤマホツツジ・ハクサンシャクナゲ・アカモノ・ウラジロナナカマド・シラタマノキ・オオヒヨウタンボク・コケモモ

草本

ハクサンフウロ・モミジカラマツ・イブキトラノオ・ヨツバシオガマ・ハクサンボウフウ・ミヤマシシウド・ハクサンコザクラ・キヌガサソウ・クルマユリ・オタカラコウ・タカネスイバ・ハクサンイチゴツナギ・カンチコウヅリナ・エゾシオガマ・イワオウギ・カラマツソウ・ミヤマキンバイ・コバイケイソウ・イワカガミ・チングルマ・ヤマハハコ・ゴゼンタチバナ・クロユリ・タカネニガナ・シナノオトギリ・シナノキンバイ・ミヤマコウヅリナ・ミヤマタンボボ・ミヤマアキノキリンソウ・イワイチョウ・ヤマガラシ・マルバダケヅキ・キバナノコマノツメ・ニッコウキスゲ・タカネアオヤギソウ・オンタデ・イワオウギ・イワツメクサ・ノウゴウイチゴ・ミツバオウレン・ミヤマダイモンジソウ・ミヤマゼンゴ・ヤマブキショウマ・ムカゴトラノオ・カニコウモリ・ハクサンオオバコ・ミヤマアカバナ・タカネナデシコ・グンナイフウロ・シモツケソウ・カライトソウ・ショウジョウバカマ・タカネマツムシソウ・ハクサンカメバヒキオコシ・イワギキョウ

皿状に開いたミヤマシシウドの花には、ヒメハナカミキリのなかまが群れ遊び、花から花へ飛び移ってはさかんに蜜をなめているようであった。

7月23～24日に植物上で採集した昆虫

ヒメハナカミキリ・オヤマヒメハナカミキリ・クロハナカミキリ・シロトラカミキリ・ヘリウスハナカミキリ・カラカネハナカミキリ・アオアシナガハナムグリ・クロアシナガコガネ・ヒメアシナガコガネ・コガネムシ・ルリハムシ・トホシハムシ・オオゴボウゾウムシ・ウスイロヒゲボソゾウムシ・コヒゲボソゾウムシ・メダカツヤハダコメツキ・オオカバ

ロコメツキ・ニセクロコガシラハネカクシ・
アオハムシダマシ・アオジョウカイ・オオオ
バボタル
コミドリハバチ・ヤドリホオナガスズメバチ

水平なハイマツ林をぬうようにして進むと、遠くに室堂(2450m)の山小屋の灯が見えた。トラップをしきかけ、昆虫採集をしながら登ってきたので予定よりも時間がかかってしまった。夕食は打ち切られ、自動販売機も閉められていたので、やむなく麓から持ってきたアーモンドとかりん糖で飢えをしのいだ。

2日めの午前中は、トラップの見回りに出かけた。甲虫類は多数得られたが、哺乳類は不作だった。今回の主目的であるトガリネズミ(モグラの一種)も一頭しかかからなかった。

カンクラ雪渓(2300m)まで下りていく途中、斜面すれすれに上がっていくチョウに出会った。白山に棲息する高山蝶のベニヒカゲ・クモマベニヒカゲも採集できた。

2300m以上で見たチョウ
ベニヒカゲ・クモマベニヒカ
ゲ・モンシロチョウ・アカタ
テハ・アサギマダラ・モンキ
チョウ・エゾスジグロシロチョ
ウ・ヒョウモンチョウの一種

昼食後、御前峰に上り、翠ヶ池へ下り、西側を巡って帰った。その間にペイトラップをしきかけた。

3日めは霧が深かったが、トラップの見回りに出かけた。御前峰の山頂にもハクサンクロナガオサムシはいた。これは、コクロナガオサムシの白山特産の亜種である。その後、麓まで調査したが、1300mまでの分布を確認した。

7月23~26日にトラップ
で採集した甲虫
ハクサンクロナガオサムシ・
キンイロオオゴミムシ・ヒメ

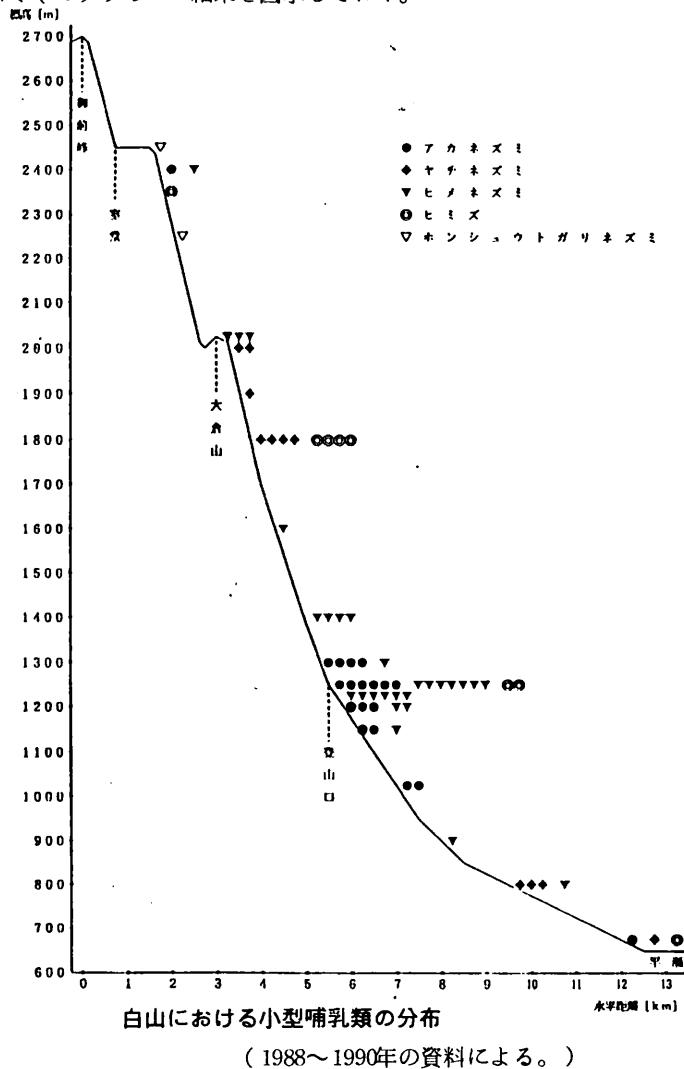
マイマイカブリ・ミヤマヒサゴメツキ・ミ
ヤママルクビゴミムシ

途中から降り出した雨にたたきつけられ、雷におびえながら山小屋へ急いだ。

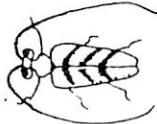
午後には雨も止んだので、トンビ岩コース→南竜ヶ馬場→エコーラインコースをひと回りした。大倉山~室堂では見られない植物も多くあった。トンビ岩コースは険しく、古い登山靴が破損してしまったので、修験者の世界に入るはめになった。

4日めは、トラップを撤収しながらひたすら下りるばかりであった。雨が降ったり止んだりの天気の中を歩くこと5時間、下界は青空であった。

最後に、白山における小型哺乳類の分布調査の結果を図示しておく。



支部だより



名古屋支部

○東谷山自然観察会（県委託観察会）

平成2年10月28日(日)

テーマ：林の仕組みと働き

（オーソドックに決めてみました）

参加者：45名（4班） 指導者：12名

コース：フルーツパーク～東谷山頂上（往復）

時間：10：15～14：30

下りは、樹木の名前当てクイズ実施

○東谷山自然観察会、こんな風に。

当日は、良いお天気で風もなく暖かな日でした。

班分け後の注意事項の説明を終えると、私は正面に東谷山がよく見える場所に皆を連れて行って、こんなふうに始めました。

「さあ、皆さん。では、正面の景色を見てください。見る範囲はこの道路から向う側全部です。後で、私がいろいろ質問しますから、出来るだけ多くのものを見て、聞いて、感じてください。時間は3分間です。では始め。」

「はい、3分間たちました。皆さん、後ろを向いて下さい。振り返ってはダメですよ。では、最初の質問をします。今見ていた中に、電信柱はありましたか？」

こんな具合です。出来るだけ意地の悪い質問をしますので、正解率はもちろん良くありません。全部の質問を終えると、こう締めくくるのです。

「人はよく見ているつもりでも、案外見落している事が多いのです。自然はただぼんやり見ているだけでは、何も与えてくれません。じっくり見て、じっくり聞いて、じっくり感じてください。今日は、そういう一日にしましょう。では、出発します。」

自然観察指導員、得意満面といったところでしようか。

こうして、私は気分良く、観察指導を始めるのです。正直に言うと、いささかあざといやり口という気はするのですが。（福西寿広）

尾張支部

11月11日(日) 愛知県委託自然観察会 濱戸市定光寺周辺 一般参加52名・指導員15名

今年初めての冬型の気圧配置となり、少し肌寒さを感じる日でしたが、参加者52名は子供からお年寄までバラエティーに富んでいました。

自然保護課のあてさつの後、会員が定光寺の自然の特徴と紅葉のしくみについて説明しました。

10時20分から3コース5班に分かれて正伝池まで観察しましたが、御手洗川沿の道路の拡張工事を行っており、無残に削られた斜面や不気味な緑色に塗装された法面も絶好の話題となりました。木の実・草の実ひろい、木の葉の名当てクイズ、森の仕組み、東海地方固有の植物シデコブシなどの説明をしながら、ゆっくり山道を歩きました。

今年はツブラジイの実が不作で全体でも2～3個しか拾えませんでした。ツクバネガシも割と少なかったのですが、アラカシだけはたくさん拾うことができました。コナラとアベマキには時すでに遅く、ほとんど腐るか根を出していました。

参加者からは、「ホウノキの葉っぱはどうして裏向きが多いの？」「この葉はどうして赤と黄が混じっているの？」というような質問もたくさん出ました。

眠くなる昼食後は、正伝池の広場で土壤動物の観察をしました。黒のビニールシートの上に腐葉土を置いてのハンドソーティング。ヤスデ・カニムシ・アリ・クモなどをルーペや実体顕微鏡で見ることができ大好評でした。（北岡明彦）



観察会の様子

会員広場(第3回)

ふりかえって見たら

西三河支部 宮本敬之助

環境とか自然とかの文字のつくことが、とってもトレンディなこと、と思われる時代になってきました。

元だか前だかの環境庁長官が言語に絶する脱税をやり、長官室で株を買っていたことに猛烈に腹の立つのも、環境という文字が増幅剤になっていると思う。なにしろ、環境庁という名前が水戸黄門の印籠の葵の御紋に匹敵する威力を持っていることは、利尻島で自然公園サブレンジャーをしている現場でも痛切な経験を持つっています。まあ、敗戦直後の「民主主義」と



高山植物の宝庫 利尻山

か「自由」と同じぐらいブンカジンに扱われている文字と思っています。知床だ、白保の海だ、白神山地のブナだ、長良川だなどなど、たとえ鳥の鳴かぬ朝はあっても、自然・環境の活字が眼に入らない朝はない時代です。

これらのことの議論に参加するのに無上の誇りと喜びを持っていたのは、久しいことでした。

しかし、冷めた眼で環境という単語を眺めてみると、なんだ「テメエ達の身の回りのことなんだ」ということになります。くたびれた天婦羅油を流してしまう、ゴミ袋を指定日以外に出す、空缶を車の窓からボンボン投げる子供を叱らない母親、ホームや道でタバコの吸殻を踏みにじって終りとする父親、自然が大好きと称する人が登山道周辺や山を汚すなど、こうして並べたてると、今まで何と空しいことを言つたのかしらと、自分自身も恥しくなって来ます。

脚下照覧。尾瀬のミズバショウに心を馳せる前に、足許のオオイヌノフグリやハコベの花に春を見つける人になりたいものだと思います。

継尾山から善師野へ

尾張支部 後藤 春

去る12月14日(金)に、曇空で少し時雨っていましたが、まず、犬山遊園から桃太郎神社まで木曽川左岸を歩きました。川の中程で流れが淀んでいるところにカモ達が20羽、30羽と浮かび、対岸近くの岩の上には、ウの姿が見られ、「今日はライン下りの船も少なくて、のんびりできるナー」と話しているようでした。

山の遠望は、松の緑をバックにところどころ黄葉・江葉がうすもやを彩っています。又、桃太郎神社近くでは、ツルウメモドキの実が豆電球をどったり束ねたように光って枯木を飾っています。

少し戻って継鹿尾山へ。紅葉の盛りは過ぎていましたが、観音堂への石段あたりは、さすが「もみじでら」ですね。

さあ、展望台を目指してもうひと息。滑りそうな赤土の岩の角々を靴裏で確かめながら、一步一步登ります。傍のコシダのかさなりが弾む息を柔らげてくれます。少し汗ばみ始めた頃、展望台へ。おにぎりを食べていると、メジロの群れが松の小枝をくぐり呼び合いながら飛んでゆきます。

尾根の坂道は丸太を階段状に埋めてあるので歩き易く、目の前にソヨゴの赤い実が「こんにちは」

やっと右手へ折れ降りると、大洞池までは黄褐色のコナラやアベマキの落葉をガサゴソされながらの雑木林。池を南へ出たら、湿ったところでフエイチゴの赤い実が濃緑の葉のひろがりの間からルビーの玉をちらちら覗かせていました。

善師野駅では5台ものショベルカーが動いていて、その騒音に、ハッと現実の我れに帰りました。

自然観察会実施状況（概数）

年	回数	種類別			支部別						指導員 延数	参加者 総数	備考	
		主催	委託	派遣	会	名	尾張	知多	西三	東三				
57	3			3	3						28	210		
58	10	1	6	3		1	1	1	1	5	1	102	746	
59	15	2	6	7		3	2	3	1	3	3	183	849	
60	12	3	6	3	1	2	1	3	1	2	2	105	526	
61	20	7	6	4	1	4	2	4	2	5	2	122	820	
62	26	10	6	13	1	4	3	5	1	10	3	209	1,810	
63	27	9	6	12	0	4	3	5	4	9	2	235	1,169	全県一斉始まる
1	26	12	6	8	2	5	2	4	3	8	3	210	1,221	
2	28	15	6	7	9	2	2	4	3	6	1	197	1,235	
計	167	59	48	60	17	25	16	29	16	48	16	1,391	8,586	



おたよりコーナー

在来タンポポに注目しよう！

尾張支部

タンポポは分類の非常に難しい種類群ですが、これは「新固有種」と呼ばれるごく最近誕生した若い種類の集まりだからです。

愛知県でみられる在来タンポポもなかなか複雑です。花が白いシロバナタンポポは別として、黄色い花の種類には、最も広く見られるトウカイタンポポ（ほとんどこれです！）、北部山間地に点在するエゾタンポポ、濃尾平野西部にあるカンサイタンポポがあり、トウカイトカンサイの中間種といわれるセイタカタンポポも知られています。

昨年、尾張支部月例観察会で話題となり、会員の佐々木正さんが尾張西部地域でタンポポ調査をされましたので報告しましょう。

一宮市と尾西市での観察の結果、写真のようなタンポポが少々見つかりました。タンポポ分類の決め手のひとつである総苞外片は写真のとおり披針形で、トウカイのような突起はありません。また、花もトウカイよりやや寂しく感じますので、カンサイタンポポと同定してよいと思われます。しかし、個体差が大きく、同じ株の中でも形状の違うものがあったそうで、形質的にはまだ不安定なものがあるようです。



花の様子

総苞外片の形状

調査地 種名	県立尾張病院 (一宮市) 1990・4・22	農道沿い (尾西市) 1990・4・30
トウカイタンポポ	266	96
カンサイタンポポ	10	10
セイヨウタンポポ	0	0
調査株数	276	106

タンポポ調査結果（濃尾平野西部）

在来タンポポと外来タンポポの比率調査は各地で行なわれてきましたが、県内の在来タンポポの分布については、ほとんどわかつていません。カンサイが濃尾平野のどこまで侵入しているのか、あるいは、エゾがどこまで南下しているのか、みなさんも、一度身の回りの在来タンポポに注目してみて下さい……。

協議会ニュース索引

(12~30号)

		(号)
◎特集記事	(号)	◎マツクイムシの不思議 12
○自然観察会 30		◎マイウオッティング 30
○野生哺乳動物 29		○八事裏山の夏が始まる 29
○水生昆虫調査結果報告 28		○カワセミの観察 28
○一斉観察会のアンケート結果 27		○セミの抜殻調査 28
○夏休み自然観察地案内 26		○全県一斉観察会の調査結果 26
○つつがむし病 25		○藤原山系春の花 25
○新春座談会「協議会の明日を考える」 24		○磯で暮らす動物の観察 25
○愛知県のブナ科樹木 23		○アミメカゲロウの集団羽化の記録 24
○全県一斉自然観察会 22		○視察研修(ブナ林と高層湿原) 23
○ヒメボタル 21		○光明寺緑地の動物 23
○自然観察指導員講習会の結果 20		○トラフズク探偵団 23
○座談会「自然観察会の進め方」 15		○エダナナフシの擬態 22
◎自然と環境NOW		○豊田一蒲郡自転車ハイク観察メモ 22
○サシバ・シデコブシ 30		○三好ヶ丘団地造成予定地の昆虫 21
○長良川河口堰問題を通して 29		◎フィールドガイド
◎郷土の自然		○岡崎公園 14
○街路樹 19		○八事興正寺 12
○矢作川をめぐって 18		◎表紙絵
○身近な自然について 17		○森は優しい色のブラインド 30
○葦毛湿原 16		○早春黄華の頃(マンサク等) 29
○湿原 14		○蛹一春を待つ姿 28
○ため池 13		○蜜の集めやすい花(ヤブガラシ) 27
○二次林 12		○富士に咲く花(ハクサンシャクナゲ) 26
◎観察と研究		○美しい細胞を持つ花 25
○カワヨシノボリのすみわけ 20		○ダニ(森を守る住人) 24
○愛される都市の中のため池 20		○コナラ林のきのこ 23
○鶴舞公園の鳥 18		○古生代への誘い 22
○休耕田の植物 18		○春草果実その姿(ナズナ等) 21
○香嵐渓の春 17		○春を待つ植物たち(ロゼット葉) 20
○一人よがりの自然研究 16		○ドングリの林の生物たち 19
○ソウギョとトンボの出会い 15		○高松海岸の化石 18
○街路樹の鳥の巣分布 14		○アケビとアケビコノハ 17
○小学校教材での試み 13		○オオマツヨイグサの開花 16
○クマバチの観察 12		○街路樹の冬芽と葉痕 15
◎生物の暮らしと分布		○ガマ 14
○愛知県のブナ林 15		○ヒシ 13
○シラタマホシクサ 14		○ネジキ 12
○タヌキモの仲間 13		

協議会ニュース 31号 目次

●早春の林で	(辻 伸夫)	表紙
●オピニオンリーダーとしての自信を持って頑張ろう	(金田 平)	1
●協議会の10年にあたって	(大竹 勝)	2
●アンケートに見る自然観察会の変遷	(中島芳彦)	3
●会員の声「協議会に望むもの」		5
(川崎慶子、平井直人、三輪治代美、丸山 嵩、戸河里光雄、 山田博一、北岡明彦、神戸 敦)		
●協議会の沿革		8
●他府県の連絡会の状況(アンケート結果から)		9
●10周年記念大会の結果から		13
●環境NOW「身近な森・海上の森を残したい」(北岡由美子)		18
●マイ・ウォッチング「白山の調査を終えて」(長尾 智)		20
●支部だより		23
●会員広場	(宮本敬之助・後藤 春)	24
●おたよりコーナー(在来タンポポ)		25
●自然観察会実施状況		25
●機関誌索引(1~30号)		26

「シキミの花と実」(しきみ科)

早春の常緑樹林。その林床はうす暗く地表に咲く早春花は見られませんが、樹木を見上げると葉かげに淡い黄白色のロウ細工のような美しい花を見つけることができるでしょう。香りのよいシキミの花が春のはじまりを告げているのです。これは、周辺のいろいろな常緑樹たちへの“芽ぶきスター”の合図なのでしょうか……。

辻 伸夫

会員異動

○脱 退

森 雅司(名古屋支部)

石田 肇()

※石田さんは、会の初期から意欲的な活動を続けてこられましたが、本年1月1日に病のためお亡くなりになりました。御冥福をお祈りします。

編集後記

今回は10周年記念特集号として、いつもよりページを増やしてまとめてみました。過ぎてみれば10年といえどもそんなに長くは思えないのですが、当初から活躍している会員の顔にも年輪を感じさせる兆候がいくつか目に付くようになりました。協議会は多くの人の協力でここまで続けてこれましたが、協議会は会員のために何かお役に立てたでしょうか。これが今後の課題であります。

次号からは、機関誌も体裁を変えて、発行回数も増やす計画です。

(佐藤)

連絡先 愛知郡日進町南ヶ丘2-18-11
佐藤国彦 (05617-3-5674)